

H27地域協働研究（教員提案型・前期）

RM-02「山田町における被災信仰石造物調査結果の可視化およびその成果公開に向けての研究」

研究代表者：盛岡短期大学部 松本博明

研究チーム員：八木光則（岩手大学）、兼平賢治（東北大学大学院文学研究科）、鳥取玖美、河野聡美（盛岡市教育委員会）

<要 旨>

本調査は、平成26年度本研究予算に採択され、調査が進められた。山田町における被災石造物だけでなく現存石造物についての悉皆調査によって現在その9割の調査を終え、調査票が蓄積されている。また昨年度、蓄積された成果を元に町内で報告会を開催し、集まった多くの町民、沿岸市町村の文化財担当者を前に、本取り組みの重要性について理解していただいた。しかし、残念ながら調査を進めていくにつれて調査対象が膨大な数に上ること、その一つ一つにしっかりとした個別調査を行う必要があることから、時間的制約および予算的制約の中で、最終確認調査および調査票の分析、トレースして可視化する作業が残ってしまっている。

本年度においては昨年度蓄積した成果を可視化し、冊子としてまとめて刊行できる状態に完結することを研究の主目的とする。発行した成果物は山田町全世帯に配布するとともに、現在信仰石造物の保存委員会が立ち上がり、調査保存計画が検討されている陸前高田市をはじめとする沿岸市町村（現在宮古市、大槌町が希望を表明している）に配布する。それによって被災文化財の価値とその現状、昨日、活用方法に対する理解を深め、その活用について町民、地域全体で考えてもらうきっかけを作るとともに、山田町の先進的取り組みを他の市町村の参考にしてもらう。加えて、当該文化資源の、高台移転、新市街地建設に関わって、心の基盤としてコミュニティ再生に寄与することを目的とする。

1 研究の概要（背景・目的等）

山田町をはじめとした沿岸市町村の石碑は地域の古文書、歴史書としての役割を担うとともに、歴史を共有する地域コミュニティの精神的核としても機能してきた。しかし今回の津波によりその多くが被災し、転倒あるいは流出した。

震災復興の伴う土地のかさ上げ工事、高台への移転工事などハード面での復興が進む中、流失した石碑、文化財等がかがれきとして処理されれば、地域の大切な文化財、記録を失うこととなると危惧した山田町教育委員会の要請で、研究代表者と岩手歴史民俗ネットワークは、平成24年6月より、町内にある信仰石造物、海嘯記念碑等の石造物の被災現況調査を進めてきた。

昨年平成26年には、被災石造物だけでなく現存石造物全体の悉皆調査によって現在その9割の調査を終え、調査票が蓄積されている。また、蓄積された成果を元に町内で報告会を開催し、集まった多くの町民、沿岸市町村の文化財担当者を前に、本取り組みの重要性について理解していただいた。

しかし、残念ながら昨年度の調査の過程で調査対象が膨大な数に上ること、その一つ一つにしっかりとした個別調査を行う必要があることから、時間的制約および予算的制約の中で、最終確認調査および調査票の分析、トレースして可視化する作業が残った。

平成27年度はこの課題を引き継ぎ、本課題の最終的目標である報告書の公刊、その文化財保護およびそれを新たなコミュニティにおける精神的結節点として活用できるようにする最終段階である。

2 研究の内容（方法・経過等）

調査においては、山田町教育委員会を主体とし、研究代表者を中心とした調査チーム（4名）を組織、其の4名については残った1割の信仰石造物の補足調査に携わる。また、山田町教委の担当者と山田史談会のメンバーとがその調査研究に現地スタッフとして協力、調査を円滑に進めるようにする。盛岡においては、調査成果をトレース（山田町の町民あるいは盛岡にて経験者に研究協力者として委嘱）最終的には、本調査の成果を冊子化し、全世帯に配布、活用してもらうことを企図している。また、冊子体以外のメディアでの公開も計画する。平成27年度も町内において報告会を実施、復興に関わって文化的資源の保存、調査、活用の重要性を町民に理解してもらうとともに、今後町民を主体とする調査団体、伝承母体が再組織されることを目途とする。

3 これまで得られた研究の成果

本研究においては、海岸に隣接する地域においては、国土地理院の地図に記載のあるものを歩きながらすべてチェックしていく作業が続いた。こうして、町内の被災石碑の全容が次第に明らかになっていった。

被災した石碑は次頁表を参照していただくことになるが、山田町全体で127基、横転折損が77基、不明が14基、と津波による被害が91基に登ることが確認された。

山田町織笠地区、織笠川河川公園に集約されていた周辺の石碑13基は、織笠川を遡上した津波によって大きな被害を受けている。現状を保っているのは「奉納四国西国神社仏閣拝禮塔」のみで、残る12基すべてが、折損、横転、あるいは流失して行方不明状態となっている。流

表1 山田町石碑調査集計表

2016/4/18

地区	山田町史	岩手の 石碑	2012～2015年調査								
			石碑確認済	石碑 未確認	被災石碑	尊像	社	古墓	墓石	金石	
豊間根	287	120	340 (78)	59	26	12	19	16	11	7	
大沢	40	16	55 (18)	1	13	2	12	3	0	0	
山田	100	32	132 (24)	14	28	1	2	1	0	0	
織笠	67	34	89 (27)	11	23	10	8	10	3	3	
船越	84	82	137 (61)	10	38	15	15	21	16	3	
計	578	284	753 (208)	95	128	40	56	51	30	13	

出した石碑は台座のみが残っており、いまだ行方がわからない。

本地区は、織笠川堤防再生工事およびかさ上げ工事の対象地となっており、破損した石碑を早急に回収保護し、別の場所で保管するなどの措置が必要と判断されたため、山田町教育委員会に即時情報を提供し、しかるべき措置を講じることになった。

悉皆調査によって明らかになった山田町の現存石碑の全体像は上の表のとおりである。全てデータベース化しており、そこから分析が可能な状態にしてある。

4 今後の具体的な展開

研究が進められ、現在9割の石造物の調査が完了している。震災の復興業務で文化財の被災調査、その活用研究に手が回らなかった山田町教育委員会が積極的に本プロジェクトに関わることが可能になってきた状況の中、山田町全体の調査を終結させて、成果を可視化し、冊子体での配布はもとより、様々なメディアで公開することが平成27年度の最終的な目標である。またそれは平成26年度の報告会で発言質問があった、沿岸の他の市町村の課題解決のための、一つの道筋を示すものとして、完成をめざす。

5 その他（参考文献・謝辞等）

松本博明「震災後の民俗調査－山田町大浦からの報告」
（第29回東北地方民俗学研究会合同研究会（平成24年11月23日）予稿集

岩手県立大学盛岡短期大学部松本研究室。岩手歴史民俗ネットワーク編『山田町所在石碑調査中間報告書』
（平成26年3月17日）

松本博明「石碑を次世代に伝える」（「山田町の石碑」報告と語る会、平成26年12月6日、山田町中央公民館小ホール）資料

表2 山田町被災石碑の内訳

地区	横転	折損	埋没	斜傾	不明	再建	計
豊間根	7	8	0	9	0	0	26
大沢	5	4	1	0	3	0	13
山田	20	3	0	4	0	1	28
織笠	2	9	2	6	2	2	23
船越	18	1	1	2	9	7	38
計	52	25	4	21	14	10	128

*不明は流失または被災後確認されその後不明となった碑。
*未確認のものは含まれていない。

松本博明「震災被災地の石碑保存 現状と課題－山田町の取組を例として－」（いわて高等教育コンソーシアム大学等における地域振興のためのセンター的機能整備事業シンポジウム集、平成27年7月11日、ホテルルイズ）シンポジウム集

なお、本調査には、共同調査研究者として、八木光則、安田隼人、兼平賢治、鳥取玖美、河野聡美、調査協力者として川端弘行、川向聖子の各氏の多大なる協力を得た。記して感謝したい。